

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成25年 5月28日現在

機関番号：27101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2012

課題番号：23720252

研究課題名（和文） 非制限関係節への新たなアプローチ

研究課題名（英文） A new approach to non-restrictive relative clauses

研究代表者

葛西 宏信 (KASAI HIRONOBU)

北九州市立大学・基盤教育センター・准教授

研究者番号：30458103

研究成果の概要（和文）：本研究課題では、非制限関係節の構造として、普遍文法は二種類の構造を許すということを主張する。一つ目の構造では、非制限関係節が、主節の要素として組み込まれておらず、もう一つの構造では、制限関係節と同じように、関係節が主節の要素として組み込まれているものの、先行詞とある種の並列関係を持つような構造をなしていると主張する。前者は、英語、後者は日本語において用いられている。

研究成果の概要（英文）：This study argues that Universal Grammar allows two distinct structures for non-restrictive relative clauses: (i) a structure where a non-restrictive relative clause is not integrated into the matrix clause and (ii) a structure where a non-restrictive relative clause is integrated into the matrix clause like restrictive relative clauses, but it is juxtaposed with its head unlike restrictive relative clauses. English employs the former and Japanese the latter.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：言語学、関係節

1. 研究開始当初の背景

Hornstein and Nunes (2008)（以下、H&Nとする。）では、従来、Merge として考えられてきた操作を、Concatenate と Labeling の二つの要素に分解することを提案し（Fukui 2008 も参照）、さらに H&N は、Labeling の操作は必ずしも起こらない、つまり、ラベル付けされていない構造が原理的に可能であると主張した。H&N の理論は、句構造理論にとって、非常に大きなインパクトを与えるものであるが、H&N の議論の中心は VP への付加を中心としたものであるため、ラベル無し構造の存在を裏付ける経験的基盤が十分に確立されているとは言いがたかった。

2. 研究の目的

（1）本研究の目的は、H&N が扱わなかった言語現象の研究を通して、ラベル無し構造の存在を裏付ける経験的基盤をより強固なものにし、それと同時に H&N の理論を精緻化することにある。具体的には、H&N の理論を(1)のようないわゆる非制限関係節に拡張する。

(1) Enrico, who is the smartest of us all,
got the answer in seven seconds.
(Ross (1986: 262))

（2）非制限関係節に関しては、言語によって、その統語的な振る舞いが異なることが、これまで報告されてきているが、そのような違いに説明を与えるということが、本研究課題のもう一つの目的でもある。

3. 研究の方法

先行研究で報告されているデータ、及び、適宜インフォーマントから収集したデータをもとに、本研究課題が提案するアプローチの妥当性を詳細に検討する。

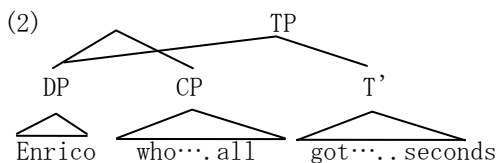
4. 研究成果

(1) 導入

本研究課題では、非制限関係節がいかにして統語部門で派生されるか、ということを中心に、実証的・理論的研究を行った。考察の結果、普遍文法は、非制限関係節の派生方法として、二種類の派生方法を許さなくてはならないという結論に至り、その派生方法を詳細に検討した。

(2) 英語タイプの非制限関係節

一つ目の派生方法は、英語などの言語で用いられる。この派生方法においては、非制限関係節は先行詞となるべき要素と併合するものの、先行詞だけが主節の要素と併合し、非制限関係節は、主節の要素とは併合されないという派生を取るようになる。具体的には、(1)は(2)のような構造を持つ。



上のような構造を仮定すれば、以下の(3)と(4)で提示した非制限関係節の奇妙な振る舞いが説明できる。(3b)では、非制限関係節の中にある束縛代名詞の *him* が主語の数量詞に束縛できないことを示している。(3a)に示すように、制限関係節内の代名詞の場合は、それが問題なくできる。

- (3) a. Every Christian₁ forgives a man who harms him₁.
 b. *Every Christian₁ forgives John, who harms him₁. (Safir (1986: 672))

非制限関係節が主節に組み込まれていないことを示している例は、他にもある。(4)において、削除された動詞句は、(5a)のように非制限関係節を除いた動詞句として解釈されなければならないが、(5b)のように、非制限関係節は動詞句の一部として解釈できないのである。

- (4) Tom sent Willie Nelson, who he admires deeply, a fan letter, and Bert did [_{VP} e] too. (McCawley (1981: 122))

- (5) a. 'send Willie Nelson a fan letter'
 b. 'send Willie Nelson, who he admires deeply, a fan letter'

(4)の動詞句の解釈も、(2)の構造を仮定すれば、容易に説明できる。

(3) 線形化の問題

(2)のような構造を仮定した場合、一つの文の中に、どの節点にも支配されていない節点が二つ作られることになる。そのような構造は、Kayne (1994)やFukui and Takano (1998)で提案されているような、線的順序を統語構造における非対称性から導き出すようなメカニズムでは、線形化することは不可能である。

しかし、Kayne や Fukui and Takano で提案されたようなメカニズムには、経験的に問題があることがすでに指摘されてきた。その一つが、(6)のような、いわゆる右側に付加しているように見える付加詞（以下、右方付加詞と呼ぶ。）である。

- (6) a. John paints pictures at all well only rarely.
 b. Jay tells jokes with any gusto only occasionally. (Branigan 1992)

(6a)は、(7)に示すように、*paints pictures at all well* が、*only rarely* より高い位置に移動することによって派生しているという分析を取れば、Kayne や Fukui and Takano で提案されたようなメカニズムでも扱えそうである。

- (7) a. John only rarely [paints pictures at all well] --- > predicate raising
 b. John [paints pictures at all well]₁ only rarely t₁

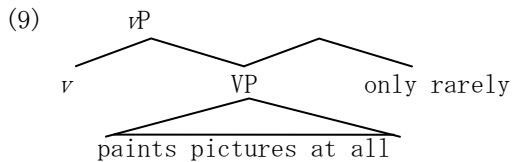
しかし Takano (2003)は、(7)に示したような分析は妥当ではないと主張している。具体的には、(7)で示した派生では、否定対極表現である *at all* は、派生の途中で、認可する側の *only rarely* によって、c 統御されているものの、最終的には、c 統御されていない。つまり、問題の否定対極表現は、再構築を通して、認可されていると言わなくてはならない。しかし、(8)で示すように、否定対極表現は、再構築によっては、認可されないのである。

- (8) *[Buy any records]₁ she didn't t₁. (Laka 1990)

したがって、(6)に示したような右方付加詞

は、Kayne や Fukui and Takano で提案されたメカニズムではうまくとらえられないということになる。一つの可能性としては、Kayne や Fukui and Takano で提案されたメカニズムを仮定しつつ、右方付加詞を線形化できるような補助的なメカニズムを提案することが考えられるが、本研究では、その可能性を追求した。

本研究課題では、(6)にあげた右方付加詞も、(9)のようなラベル無し構造を持っていると主張し、(2)の構造と(9)を統一的に説明する線形化のメカニズムを提案した。



具体的には、(10)のようなメカニズムが必要となる。

(10) Suppose A and B undergo Merge without producing any label. If A also has a labeled mother, B is linearized in the position which immediately follows A.

(4) A-移動による非制限関係節の非残留性
(2)の構造では、非制限関係節がTP指定部に併合されているが、*vP*内主語仮説を仮定すると、*Enrico*は*vP*の指定部に基底生成されるため、その位置に、非制限関係節が併合され、関係節の先行詞である主語だけが、TP指定部に移動するという派生も原理的には許されそうである。その場合、非制限関係節が、主語の基底生成された位置に取り残されることが予測されるが、実際は、(11)で示すように、A-移動によって、非制限関係節が取り残されることはない。

(11) *Sandy always seems, who I' m sure you remember, helpful.
(Arnold (2007: 285))

本研究では、(11)の非文法性も説明できることを示した。名詞句は、値が与えられていない、格素性を持ち、それは、TP指定部に移動した際に値が与えられるという仮定を採用する。したがって、*vP*指定部の基底生成された位置では、格素性はまだ値が与えられていない。非制限関係節は、その先行詞と一緒に、各インターフェースに送られるとすると、非制限関係節の先行詞は、*vP*指定部に基底された段階で各インターフェースに送られることになり、まだ値が与えられていない格素性は、インターフェースで解釈されず、それが非文法性の原因となる。

ここでの説明の予測としては、格素性に値が与えられた後では、非制限関係節は、先行詞が動いた後も、元の場所にとどまっていることができるという予測になるが、(12)は、その予測が正しいことを示している。

(12) Who_i did we teach t_i, some of whom were deaf, French? (Fabb (1990: 70))

(5) 日本語タイプの非制限関係節

日本語の非制限関係節は、英語の非制限関係節とは異なり、別の方法で派生される。英語の非制限関係節が主節に組み込まれていないということを主張する際、その根拠として、(3)の変項代名詞の可否と(4)の削除された動詞句の解釈を挙げてきたが、その二点において、日本語の非制限関係節は、英語のそれとは異なった振る舞いを示す。(13)では、関係節内の束縛代名詞の「そこ」が、主語の「ほとんどの会社」によって束縛されている。また、(14)の削除現象では、削除された動詞句は、「pro ずっと会いたがっていたチョムスキーを紹介する」という関係節を含む動詞句として解釈される。

(13) ほとんどの会社_iがそこ_iの社員が行きたがっていたハワイに支店を出した。

(14) 先生は太郎に[VP e] よりも先に次郎に [pro ずっと会いたがっていた]チョムスキーを紹介した。

(13)と(14)のデータを考慮すると、日本語の非制限関係節は、制限関係節のように、主節に組み込まれているような要素であることがわかる。しかし、日本語の非制限関係節を制限関係節と同じように分析した場合、(15a)と(16b)における非制限関係節の振る舞いをどのように分析するのかが問題となる。

(15) a. *あなたは何を書いた村上春樹を知ってるの? (三宅 (2011: 95))
b. あなたは何を書いた小説家を知ってるの?

(16) a. 最近はろくな試合をするボクサーがいない。
b. *ろくな試合をする矢吹丈がいない。
(三宅 (2011: 96))

(15a)で示すように、非制限関係節の中には、*wh*句が生起できないのに対し、(15b)では、制限関係節はそのような制限がないことを示している。また、(16)では、否定対極表現の一つである、「ろくな」名詞句が、制限関係節の中に生起した場合、主節の否定によって認可されるが、非制限関係節の中に生起し

た場合は、それができないことを示している。
本研究課題では、日本語の非制限関係節は、(17)のような、名詞句を並列させたような構造と同じように分析できるのではないかという主張を行った。

(17) 日本の首都東京

具体的には、(18a)の非制限関係節は、(18b)のような構造を持っていると主張する。

- (18) a. 太郎がこの本を書いた村上春樹に会った。
b. 太郎が [_{NP} [この本を書いた] pro] 村上春樹に会った。

この分析のもとでは、非制限関係節と思われるものの主要部は、実際は音形を持たない pro が占めている。日本語は、項省略を許す言語であるので、pro の存在は独立に動機付けられていると言える。また、(19)が示すように、pro を音形を持つ名詞句に置き換えることもできる。

(19) 太郎がこの本を書いた小説家村上春樹に会った。

また、(15a)と(16b)の非文法性については、それぞれ(20)と(21)の非文法性に還元することができることとなる。

- (20) *あなたは何を書いた小説家村上春樹を知ってるの？
(21) *ろくな試合をするボクサー矢吹丈がいない。

ここでの分析では、日本語の非制限関係節と呼ばれているものの主要部は、pro であるので、日本語の非制限関係節では、主要部として名詞以外のものは現れないという予測になるが、実際その予測は正しい。(22)が示すように、英語の非制限関係節では、名詞以外のものが主要部に現れることができるが、このような違いが生じるのも、英語と日本語は、非制限関係節の派生に関して違う方法を取っているからであると言える。

- (22) a. Mary was intelligent, which John never was.
b. I told max to leave, which he never did. (Demirdache (1991: 108))

(6) まとめ

本研究課題では、非制限関係節の派生方法には二種類あることを示し、派生方法の違いが英語と日本語の非制限関係節における違い

をうまく説明できることを示した。日本語の非制限関係節については、これまであまり研究がなされてこなかった領域であり、今回の研究成果を踏まえて、さらに研究を進めていきたいと思っている。

今後の課題としては、今回の研究で得られた研究成果の妥当性を、より多くの言語に照らし合わせて、検証することが挙げられる。また、(17)のような日本語の並列構造がどのような構造を持っているかは、いまだ明らかになっていないため、それを今後明らかにしていくことも、日本語の非制限関係節の理解にとって必要不可欠であると思われる。

(7) 参考文献

- Arnold, Doug. 2007. Non-restrictive relatives are not orphans. *Journal of Linguistics* 43:271-309.
Branigan, Philip. 1992. Subjects and complementizers. Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, Mass.
Demirdache, Hamida. 1991. Resumptive chains in restrictive relatives, appositives and dislocation structures. Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, Mass.
Fabb, Nigel. 1990. The difference between English restrictive and nonrestrictive relative clauses. *Journal of Linguistics* 26:57-78.
福井直樹. 2008. 「基本演算をめぐる覚書」, 『言語研究の現在』, 金子義明他(編), 1-21, 開拓社, 東京.
Fukui, Naoki, and Yuji Takano. 1998. Symmetry in syntax: Merge and Demerge. *Journal of East Asian Linguistics* 7:27-86.
Hornstein, Norbert, and Jairo Nunes. 2008. Adjunction, labeling, and bare phrase structure. *Biolinguistics* 1: 57-86.
Kayne, Richard. 1994. *The antisymmetry of syntax*, MIT Press, Cambridge, Mass.
Laka, Itziar. 1990. Negation in syntax: On the nature of functional categories and projections. Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, Mass.
McCawley, James. 1981. The syntax and semantics of English relative clauses. *Lingua* 53:99-149.
三宅知弘. 2011. 『日本語研究のインターフェイス』, くろしお出版, 東京.
Ross, John Robert. 1986. *Infinite Syntax!*, Ablex, Norwood, New Jersey.
Safir, Ken. 1986. Relative clauses in a theory of binding and levels. *Linguistic Inquiry* 17:663-689.
Takano, Yuji. 2003. How antisymmetric is

syntax?. *Linguistic Inquiry* 34:516-526.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

(1) Hironobu Kasai, Review of B. Citko (2011) *Symmetry in Syntax: Merge, Move, and Labels*, *Studies in English Literature English Number* 54, 115-126. 査読有

[学会発表] (計5件)

① Hironobu Kasai, Appositive relative clauses revisited, WorkShare 2012, 2012年11月2日~2012年11月3日, ナント大学(フランス)

② 葛西宏信, Multi-dominance and appositives, CREST 言語理論講演会, 2012年10月18日, 上智大学

③ 葛西宏信, Arguments for multi-dominance, 東京大学英語学研究会, 2012年9月29日, 東京大学

④ 葛西宏信, A multiple dominance approach to parasitic gaps and appositive relative clauses, 北九州言語学研究会, 2012年8月4日, 北九州市立大学

⑤ 葛西宏信, Multiple dominance and parasitic gaps, 第11回福岡大学言語学コキュアム, 2012年3月2日, 福岡大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

葛西 宏信 (KASAI HIRONOBU)
北九州市立大学・基盤教育センター・准教授
研究者番号: 30458103